

全国的に見ても貴重な資料がいっぱい

花押・焼き印入り 木簡

これまで花押(署名の下に書く)入りの木簡は、昨年、大阪府の守口市で発掘された正和四年(一三二五)と記されたものが、日

本最古とされています。

馬場屋敷下層遺跡から発掘されたものは、これよりも二十四年古い正応四年のもので、全国的に見ても貴重な資料と言えます。発掘された木簡や木札は五十二点で、書式などから二種類に大別される

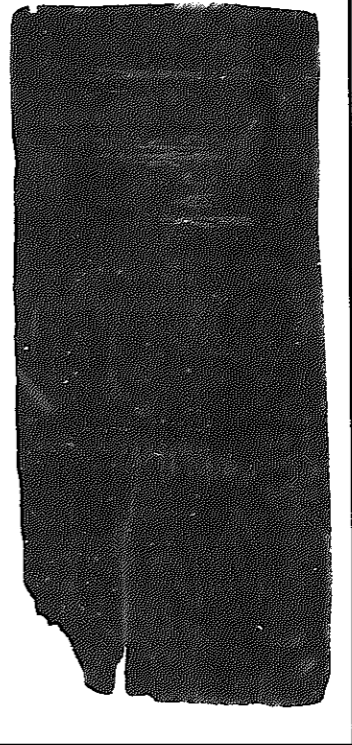


図1



図2

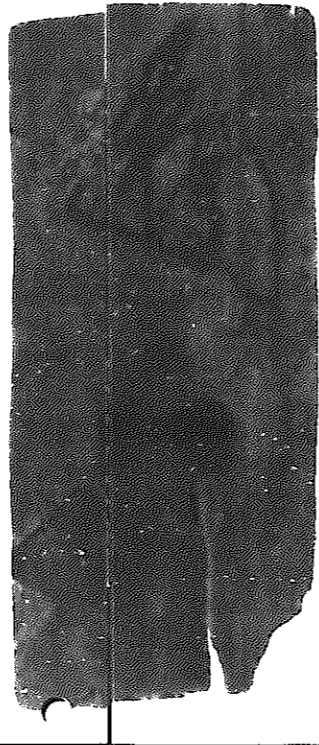


図3

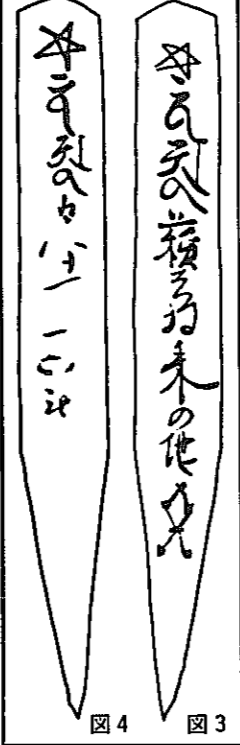


図4

正応六年正月 日

花押・焼印

報告書では「一つは花押、焼印があり地名か人名と考える名があり、そして、かやのふた(だ)」と記されたもの。もう一つは「呪符類」と述べています。

前者には、正応二年(一二八九)から延慶三年(一一三〇)まで、二十一年間にわたる範囲内の年号を記したものが五点ありました。

この木簡、木札がどのような性格を持ち、使用されてきたものかは、今後の調査研究によるところが大きいわけですが、報告書で述べられていることや、市史編纂室の竹石 暹主任の話から次のように推測できるようです。

『かやのふた(だ)』は 証明書か

『かやのふた(だ)』(写真・図1・2)は、特定地域の萱の収穫許可(命命)する内容で、下級荘官と考える者の花押、焼印があり、次のように解釈できるようです。

『よしへのかやのふた(だ)』

『呪符』は悪魔、悪霊 私の願文か

『呪符』については「蘇民将来札」や、「告知札様の呪符」「道教様の呪符」「祈願の呪符」など、いろいろな種類に分類され、どれも信仰に用いられたものと思われる。

代表的なものとして「蘇民将来札」(図3・4)は、次のように書

かれています。

『☆ひれ入九々八十一一十V々V』

中世は戦闘、飢饉、疫病、天災果ては強盗など自然的、社会的不安が多発し、人々は密教によってその救いを求めました。

こうした時代の中で、『清水沿革誌』でも伝えられているように、全国的にいわゆる私僧が遊行し、

ほどの社会的混乱事件でした。

このため末端村役場の打ちこわしなどで公文書が散失し、統治機能はマヒする一方で、さらには村落社会内からは旧体制派が一掃されこれらの人々は、開拓の苦役に供されたと伝えられています。

ようするに、この一揆を征討した溝口氏の時代になると、上杉時代、中世の歴史はごく一部に伝承によってのみ生き続けることになったのです。

溝口氏は人心の掌握を慈悲の授受に求めました。前任地の加賀国からの追慕農民には同じ名主でも格式の高い称号を与えました。このような「旧家等訶柄ある」家に

染付の皿

出土形跡が希有

三遺跡からの出土された陶磁器の種類は、圧倒的に珠洲系が多く、次いで瀬戸系、青磁、越前系となっています。

珠洲系陶器は、すり鉢類、かめ、壺が、瀬戸系では平鉢や小皿類などが主なものです。

また、中国明時代の青花をあしらった染付皿が、保存・保管を目的とした「デユボ」(一括遺物)で出土した例は、全国では「福井県一乗谷朝倉氏遺跡」のほか「山梨県東八代郡一宮町荒巻本村」「鳥根県三太郎古墳」が知られているにすぎず、これも貴重な資料です。



染付皿

馬場屋敷の塚

県内の経塚研究に
大きな手がかり

経塚は、経典を書写し供養をして埋納した仏教遺跡です。馬場屋敷の塚は一字一石経塚で、その营造年代は単に近世という幅の中で考える以外に、具体的な年代を知る手がかりは得られませんでした。

県内における「一字一石経塚」(それと考えられるものを含む)は四十二基で、古代、中世のもとは判明されているのは、わずか一基にすぎず、その他は、いずれも近世の造営と考えられています。

ただ、これらについては埋納形態に關しての報告例はなく、今回の調査報告が県内の経塚研究に大きな役割を果たさうです。



石経

市史編 さん室

「本市にも古い歴史はあるはず」と、かつて『市史よもやま話』に連載した仮定が、今回の調査でいみじくも的中したと言えます。

今まで本市の歴史は、明治時代の『皇国地誌』を原型にした『中蒲原郡誌』(大正時代編さん)に求められてきました。



竹石主任

同誌は新発田藩の史料やこれと符合する民間伝承を主な材料に、皇国史観をもって記述されました。その結果、溝口氏入封開びやく説が都合よく説明されるために、